加藤泰史・松塚ゆかり編

『人文学・社会科学の社会的インパクト』

（法政大学出版会，2023年，364頁）

西村　君平（東北大学）

本書は，人文学・社会科学の研究者がそれぞれの専門性を活かす形で，人文学・社会科学の社会的インパクトについて再考するものである。こうした反省的思惟の背後には，「切り詰められたイノベーション（≒技術革新）」（イノベーション概念については本書の第1章で詳細かつ巧みに論じられている），なかんずくそれによりもたらされる経済効果の観点からしか大学や学術，科学の価値を捉えようとしない風潮に対する深刻な問題意識がある。この問題意識を編者の一人である松塚ゆかり氏は以下のように表明する。

最近大学にとりわけ期待されている課題は，本書の問題意識の中枢をなす技術革新への対応であろう。技術革新への対応はおよそいずれの国でも大学に求められており，その線上に近年の理工学分野重視の傾向が位置づけられる。（略）しかし，その要求に一元的に答えることが大学の使命ではない。理工学系の技術力の発展は，生産性を向上させ，新たな市場を生み，就業の機会を拡大する。しかし一方で情報が一人歩きをし，偽りの情報が瞬く間に拡散し，偏見や差別が助長される現実がある。人間不在の空間の拡大と親身なコミュニケーションの不足は物理的精神的両面で人の孤立を招いている。マハトマ・ガンジーが七つの社会的罪の一つに挙げた，science without humanity（人間性の無い科学）の危険と表裏一体に技術は発展している。ここに，多様で不明瞭な人間社会を対象とし，個性的かつ腹足的な事柄に意味を認める人文学・社会科学の理知が必要になる（pp.351-352）。

概要

本書は四部構成のアンソロジーである。「第Ⅰ部　人文学・社会科学の現代的危機とは何か？」「第Ⅱ部　海外の人文学・社会科学の現状」「第Ⅲ部　人文学・社会科学の社会的インパクトとは何か」「第Ⅳ部　若手研究者の現状」である。

「第Ⅰ部　人文学・社会科学の現代的危機とは何か？」では現代日本における人文学・社会科学の危機の様相やそこからの脱却の手がかりが俯瞰的に検討されている。今後の人文学・社会科学の展望を指し示すキーコンセプトとして「責任ある科学イノベーション（responsible research innovation）」が提起されており示唆的である。また，詳しくは後述するが，第2章で問いかけられる「現在の人文学・社会科学の危機は文教政策や学術振興策の発想の貧困だけに由来するのではなく，人文学・社会科学の内部の知のあり方にも大きな原因があるのではないか」という胃の痛くなるような問いは非常に刺激的だ。

「第Ⅱ部　海外の人文学･社会科学の現状」では，中国，アメリカ，ドイツのケーススタディである。3つの事例は単なる先進例として表層的に紹介されているのではない。人文学・社会科学軽視という現代の大学の共通の病理に対して，それぞれの国の政策や現場の教員がどう向き合っているかが多角的に分析される。

「第Ⅲ部　人文学・社会科学の社会的インパクトとは何か」では，倫理学，経済哲学，教育経済学，文学，比較文学の観点から様々な形で人文学・社会科学の社会的インパクトが語られる。部のタイトルからも明らかなように，第Ⅲ部は本書の山場であり，非常に読み応えがある。人文学・社会科学諸領域それぞれの観点や理念を深く学ぶという意味で，一級の高等教育研究の資料でもある。

「第Ⅳ部　若手研究者の現状」ではドイツおよび日本の若手研究者の現状（というか窮状）が検討される。日本のケーススタディでは，コロナ禍の中で大学院生を含めた若手研究者の実態が具に検討されている。世間的にはコロナ禍はもう終わったかのようなムードだが，コロナ禍が学術に残した爪痕はそう簡単に癒えるものではないことを痛感させられる内容となっている。

高等教育研究へ

全ての論考に思わず唸りたくなるような読みどころがあるのだが，それを列挙していてはとても紙幅が足りない。不躾で恐縮だが，高等教育研究者にお薦めしたい優れた論考をいくつかピックアップしてその魅力を紹介することにしたい。

第2章「文系学問の危機とは何か」

本章では数理社会学者の盛山和夫氏が人文学・社会科学の内部の知のあり方を深掘りしている。人文学・社会科学の実践的な性質の極致として，あり得べき社会のあ

り方とそこに至る道筋を照らし出す「社会を創る」機能が確認された上で，その機能を阻害するポストモダンの懐疑主義・相対主義の問題が分析の俎上に上げられる。さらにそこから人文学・社会科学の本義やその再興に向けた議論が展開されていく。

本章の議論は人文学・社会科学にフォーカスした優れた大学論・科学論にもなっており，高等教育研究者には必読である。数理社会学者らしいソリッドな論理で人文学・社会科学のある種の内憂外患を抉り出す手腕は見事であり（数理的な分析が行われているわけではない），この点にも注目してほしい。

第6章「人文学は我々が世界を理解するための助けとなる」と第12章「競争で燃え尽きた世代」

ドイツに関するケーススタディは2編あるが，これを並べて検討するのは非常に興味深い。

第6章のゲジネ・フォルヤンティ＝ヨスト氏（訳：府川純一郎氏）「人文学は我々が世界を理解するための助けとなる」では，2007年の「人文学年」の成功に焦点が当てられている。ドイツで人文学が複雑な現代社会の行末を示す指針を構成する重要な機能を有することが政策コミュニティに広く受け入れられる顛末が語られており，それにより人文学にもたらされた恩恵や残された課題にも言及されている。

第12章「競争で燃え尽きた世代」では，「人文学年」の成功の裏にあるドイツの若手人文科学者の窮状が赤裸々に語られる。ドイツでは大学教授資格を得て（正）教授になる者がごく限られていることはよく知られている。本章では教授以外の大学教授職が，任期付きの不安定な身分のもとで，十分な研究時間・研究環境が与えられないまま，雇い止めの恐怖にさらされていることが明らかにされている。本章を読むと，「人文学年」の恩恵は一部の正教授とその周囲にしか及んでいないのではないか，アカデミアにおける世代格差の問題から目を背けているのではないかどという思いがどうしても拭いされない。

ドイツの事例を本書により与えられた2つの観点で捉えてみると，私たちが「人文学・社会科学は不要だ」とか「いや人文学・社会科学には他に変え難い社会的インパクトがある」とか論じる時のPICO（Population, Intervention, Comparison, Outcome）を特定することがいかに難しいか痛感させられる。このことはもちろん日本にも当てはまる。我が国で政策コミュニティの面々や人文学・社会科学の研究者たちが人文学・社会科学の社会的インパクトについて語り合う時，念頭に置かれている具体的な事象はどこまで一致しているのだろうか。私にはかなり疑わしいように思われる。

第7章「人文学の社会的意義の説明」

本章では倫理学者である蝶名林亮氏が「人文学の社会的影響を明らかにし，国や社会が人文学を保護・支援する意義を説明する」（p.170）という戦略のもとで，個々のディシプリンやテーマに即してその社会的インパクトを説明していくという局所主義的な方略が提示される。この方略は人文学・社会科学について語るときの一つの壁となるPICOの不定性を回避するものとして非常に優れている。

具体的には日本史学と哲学が事例として検討されている。特に後者の一領域であるメタ倫理学については筆者独自の論理が提示されていて興味深い。蝶名林氏はメタ倫理学における自然主義と非自然主義の対比を取り上げて，自然主義と非自然主義のどちらの立場を支持するかによって，道徳教育のあり方が根本から変わることを明らかにしている。

メタ倫理学のケーススタディは例証あるいはパフォーマンスであって，その主要な狙いはメタ倫理学の社会的意義を示すことにあるわけではない。あえてメタ倫理学という抽象度の高い領域の社会的意義を丁寧に掘り起こすことで，たとえ抽象度の高い研究領域であっても研究の含意を丁寧に紐解きながらその社会的意義を専門外の領域に説明していくことが，人文学の社会的インパクトを挙証するための最も基礎的な営為になることを示唆しようとしている。いわば，蝶名林氏の試みは，人文学諸領域へのエールである。

人文学･社会科学者の声は政策コミュニティに届くか，私自身は筆者たちの問題意識に心底共感しながら本書を読んだ。また，高等教育研究の末席に身を置く者として，本書を通して人文学・社会科学諸領域の肌感覚・現場感覚のようなものに触れられた気がして（特に人文学），とても楽しい勉強ができた。改めて，高等教育や大学の多面性をしみじみと味わえた。

ただ，本書の試金石は人文学・社会科学の社会的インパクトを認めない政策コミュニティ，例えば総合科学技術・イノベーション会議の組織や運営に関わる政治家や官僚，経済界の面々とその背後にある我が国の市民たちの認識を改められるかどうかである。これはもちろん簡単なことではなく，どれほど優れた書籍であっても，単

独で達成できるものではない。しかし，本書を一読すれば，それぞれの分野で自らの社会的インパクトを反省的に考察したり，その分野の専門知を活かして「社会を創る」機能を発揮していくことの重要性に気づくとともに，そのための様々な手がかりを得ることができる。一人でも多くの方に本書を手に取っていただき，それぞれの舞台で人文学・社会科学の社会的インパクトを結実させていってほしいと心から願っている。もちろんアカデミア以外の人も。私も微力で卑小な身だがそうするつもりだ。